

1960年北九州市生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了後、同大学助手となり、その後大阪教育大学専任講師を経て現職。専門は、教育方法学および教育工学。最近の研究分野は、総合的な学習のカリキュラム開発、評価セッションの理論と実践など。著書に「総合的な学習で育てる実践スキル 30」(明治図書)など多数。



「評価規準」と「評価基準」 ●教育評価における「評価規準」と「評

価基準」とは、どのように区別して使われているのですか。



一人ひとりの子どもの絶対評価(目標に準拠した評価)を行うためには、3つのレベルでしっかりとした評価の尺度、つまりものさしを準備しておかなければなりません。それは、評価の観点、規準、そして基準です。

まず「評価観点」とは、子どもにつけたい力(知識・技能・態度など、学習を通して成長した子どもの姿)を、短い用語で示したものです。教科学習では、文部科学省が、原則的に「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」という4つの観点によって観点別評価を行うことを求めています。この評価観点とは、評価規準を整理する「つけたい力の領域」とであるととらえることができます。

また、総合的な学習の時間の評価についても、指導要録において観点別評価を行うことが求められていますので、各学校において、教科学習での評価の4観点や、生きる力の資質・能力などをふまえて、適切な評価観点を設定することが必要です。例えば、コミュニケーション能力、情報活用能力、自己評価力、共生的態度、ボランティア精神等は、総合的な学習の時間のねらいを生かした学校独自の評価観点になります。

次に「評価規準」とは、評価観点によって示された子どもにつけたい力を、より具体的な子どもの成長の姿として文章表記したものです。例えば、評価観点の「情報活用能力」の中に整理される評価規準としては、「コンピュータを用いて、川のごみの様子を写真と文章を組み合わせながらわかりやすく説明することができる」というような文章表記になるでしょう。

そして、評価規準を作成するとき、それぞれの単元で固有の学習内容と学習材、そしてつけたい力を関連づけて、具体的な活動場面を想定

しながら文章表現を工夫することが大切です。

総合的な学習の時間の評価では、指導要録での記入様式が、「活動・観点・評価」という3つの欄で構成されているだけです。各単元の評価計画を作成するときには、この評価規準のレベルまで明確にできれば十分でしょう。

しかし教科学習における絶対評価においては、さらに、それぞれの評価規準で示したつけたい力を、どの程度まで習得しているのかについてより具体的に明示しておくことが必要になります。それが一般に「評価基準」といわれるものですが、文部科学省は、判断基準という用語を公式に用いています。

「判断基準」とは、評価規準で示されたつけたい力の習得状況の程度を明示するための指標を、数値(1・2・3)、記号(A・B・C)、または文章表記で示したものです。その意味では、判定水準という用語を使う方が正確であるといえます。ただし、数値や記号だけでは具体的な習得状況の程度を示すことはできませんので、文章表記を併記することが必要です。

例えば、上記の評価規準の例に従えば、次のような表記になるでしょう。

- ・判断基準A(十分に満足)…「説明内容の構成が論理的であり、コンピュータの特性を生かして証拠となる5枚以上の説得力ある写真が提示されている」
- ・判断基準B(おおむね満足)…「説明内容の構成は論理的であり、証拠となる写真を3枚程度提示できている」
- ・判断基準C(努力を要する)…「説明内容には論理的な構成がとれていない」

この判断基準の結果を点数化することによって、指導要録に記載する観点別の評定結果を算出することができます。



ルーブリック

●目標に準拠した評価の判断基準として、最近「ルーブリック」ということが言われています。「ルーブリック」とは何ですか。



「ルーブリック」とは、絶対評価のための判断基準表のことです。

英語では、rubricと表記し、もとは聖書の教典の中で教会の儀式のあり方を朱書きで示したものを意味していました。そこから、行動規範といったような意味で使われるようになり、教育用語としては、アメリカ合衆国で1980年代からポートフォリオ評価法とともに、絶対評価の判断基準表を意味する用語として広く使われるようになってきました。現在では、アメリカだけでなく、韓国やオーストラリアの学校でも広く使われるようになっています。

判断基準表は、縦軸にある単元に含まれる活動内容を列挙し、横軸にそれぞれの活動で想定される評価観点と評価規準、そしてそれらをより具体化した判断基準を整理して並べた一覧表です。最も詳しい判断基準表では、それぞれの基準（A・B・C）に点数（3点・2点・1点）を与えて、観点毎の合計点や単元の学習成果の総括的な点数を算出できるように工夫したものもあります。

また、判断基準をA判定とB判定の2段階のみで一覧表に記述して、それに到達しないC判定については判断基準を文章表記せずに、「C判定の児童・生徒への補充指導のあり方」を記入する方法もあります。

こうした特徴を持つルーブリックを、各学校ですべての教師が作成するようになってきたのは、特にペーパーテストでは評価しにくい観点において、より客観的で、しかもより高い妥当性と信頼性をもちながら評価できるようにするためです。したがって、ルーブリックには、「知識・理解」の観点だけでなく、その他の3つの評価観点で示された多様な資質・能力を取り上げることが大切です。

ただし、ペーパーテストで客観的に評価しにくい観点を扱えば扱うほど、その判断基準の文章表記やレベル分けの仕方について、継続的な改善と修正を行うことが必要になります。

さらに、各単元で設定したルーブリックを用いて算出した、一人ひとりの児童・生徒の観点別評価得点を、年度末の指導要録における評定に換算するためには、一定の「換算公式」を各学校において設定しておかなければなりません。より妥当性と信頼性の高い換算公式にするためには、同じ学年や同じ教科の教師集団が、児童・生徒の学習状況を、ペーパーテストの得点だけではなく、作品分析や行動観察によって多面的にとらえて共有化して、それらを基にして常にルーブリックの改善と修正を行うことが大切です。

また、必要に応じて、他校のルーブリックと比較検討することによって、少なくとも同じ市町村内の学校間でルーブリックや得点換算公式に大きな違いがないように、「判断基準検討会議」などを開いて情報交換を行うことも求められるでしょう。

総合的な学習の時間については、指導要録では観点別の評定が求められているわけではありませんから、ルーブリックを教師が正式に作成する必要はありません。しかし、コミュニケーション能力や情報活用能力のように、明確な判断基準が作成可能である観点については、ルーブリックを使って評価した結果を子どもにフィードバックすることは、意味のあることです。また、子どもに自己評価のためのルーブリックを作らせて自己評価を行わせると、子どもが主体的に自己評価力を身につけるようになっていきます。



評価計画の立案

●評価計画を立てたいのですが、具体的にはどのように進めたらよいのでしょうか。



絶対評価が行われるようになって、各学校において評価計画の立案が求められるようになりました。それは、絶対評価が目標に準拠した評価であるために、目標分析から評価規準の明確化、そしてルーブリックの作成、評価の時期と方法の明確化といった一連の作業を計画的かつ明示的に行う必要が生まれたからです。

つまり、最低でも「何を、いつ、どう評価するか」といった評価の“2W1H”を明確にした上でないと、しっかりとした目標に準拠した評価、すなわち絶対評価が行えないのです。これまでのように、教科書の内容に沿った授業をして、全体的な難易度に注意しながらペーパーテストを学期末に作成して、定期テストや期末考査をしているだけでは、絶対評価をしたことにはなりません。

さらに、評価計画を必要とするもう1つ大きな理由があります。それは、「指導と評価の一体化」といわれるように、指導内容に沿った評価を行うこと、そして評価結果を受けて指導を改善すること、という2つの課題を達成するためには、各単元の活動計画と評価計画を連携させて作成することが必要だからです。そこで実際には、「活動と評価の計画」というようにして、1枚の一覧表で2つの計画書を合体させて記述することも可能です。

少なくとも、評価計画は、次のような条件を満たすために作成するものです。

まず、表の左端に、縦に1次から順に指導内容や活動内容を整理してまとめましょう。次に、中央部分に大きく評価観点を横に並べて書き、その下のセルの中に指導過程の次毎に評価規準を整理して入れていきます。

さらにその右側に、順に指導過程の次毎にま

とめて評価方法と評価時期を記入し、最後に表の右端に、それぞれの評価規準が想定するつきたい力を育てるための指導と支援のポイントを書き込めば、基本的な評価計画表ができあがります。

単元末のペーパーテストによって「知識・理解」の習得状況を評価するときには、指導過程の終了後にテストが行われますので、評価計画の最下段の欄外にその評価時期と評価方法を示すなどの工夫をしましょう。

また「思考・判断」と「技能・表現」に関わる実技評価（実技テスト）については、これらできるだけ積極的に評価計画に書き込むようにしたいものです。特に中学校においては、ほとんどの評価方法をペーパーテストに限定してしまう傾向がありますので、スピーチテスト、作品分析、聞き取りテスト、ミニ実験テストなどの実技テストを豊富に取り入れるようにしましょう。

ルーブリックは、このような評価計画で示された評価規準を、より具体化して示したものですから、評価計画とはまた別に作成する必要があります。

ただし、総合的な学習の時間の評価については、この評価計画で示されたすべての評価規準を、すべての児童・生徒について当てはめて評価する必要はありません。総合的な学習の時間の評価は、観点別評価であるといっても、観点の選択も設定する観点の個数も、各学校の裁量に任されているからです。「個人内評価」の趣旨を生かして、それぞれの子どものよさと可能性を示す顕著な成長をみとりながら、評価計画で示されている評価規準のうちから3つから5つを選んで、各学期の評価結果にすれば十分でしょう。



評価と授業改善

●新しい評価で、「指導と評価の一体化」とか「授業改善なくして絶対評価なし」といわれます。新しい評価の目指すところは何ですか。



絶対評価が学校現場に導入されてから、ほぼ2年が経ちました。この間に、評価規準の明確化やルーブリックの作成、そして評価計画の立案など、絶対評価を行うために必要な作業はかなり広がってきました。また、評価研究を熱心に行っている学校では、より正確な絶対評価を行うために、分厚い補助簿を作成して、一人ひとりの子どもの成長を多面的な評価観点から多様な評価資料を用いて、しっかりととらえようと努力しています。

さらに、保護者に十分な説明責任（アカウントビリティ）を果たすために、このようなしっかりとした計画的な絶対評価による評価結果を、懇談会などで詳細に通知している学校も少なくありません。

このようにして、絶対評価を本格的に実施している学校が増えているのは確かなことなのですが、ここで1つの問題提起をしておきたいと思います。

それは、「絶対評価で授業は変わりましたか」という問いです。

絶対評価は、もちろん新しい評価方法ですから、初めはこの新しい評価方法に慣れることで精一杯になっているのも無理はありません。しかし、絶対評価の本来のねらいに立ち戻って考えてみると、それは、多様な評価観点が示す多様な資質・能力を子どもに育てるための授業づくりを前提にしている評価であることが分かります。

つまり、「知識・理解」だけでなく、子どもの「関心・意欲・態度」を育てる授業を行うとともに、子どもの「思考力・判断力」を育てる授業、そしてさらに、子どもの「技能・表現力」を育てる授業を、評価をする前にまず実施して

おかなければ、絶対評価が本当に生きることはありません。

いいかえれば、学習教材の工夫・改善や子どもの問題解決的な学習過程を大切にしたい授業を行うことなくして、本当の意味での絶対評価を行うことはできないはずです。そのような授業改善の工夫や努力なくして、一斉指導とペーパーテストを中心にした従来と同じような教育活動を行うままでは、ペーパーテストで明らかになった「知識・理解」の評価結果を、無理に他の評価観点の評価結果に変換して評定をしているにすぎません。それでは、観点別評価の趣旨を生かしたことになるのはいうまでもありません。

このように授業のあり方と評価のあり方が分離していかないように、いいかえれば、評価の精度だけが研ぎ澄まされて、授業の進め方はこれまでの一斉指導と同じということにならないように、先の教育課程審議会の答申では、「指導と評価の一体化」という授業改善の方向性が明確に打ち出されているのです。

そのために、具体的には、この「新しい評価Q&A」の3で示したように、評価計画の中にできれば、「指導と支援のポイント」をそこで設定した評価規準と連動する形で明記することが大切なのです。つまり、評価計画の中の「指導と支援のポイント」を見れば、その授業がいかに子どものもっている多様な資質・能力を育てるために工夫された授業であるかがすぐにわかるからです。

「授業改善なくして絶対評価なし」

このことを、これからの教育改革のスローガンとして、子どものための絶対評価を積極的に展開していきたいものです。



ポートフォリオ評価

●「ポートフォリオ」を、子どもの「生きる力」の成長に生かすには、どうすればいいですか。



「ポートフォリオ」という用語は、もともと有価証券運用表という意味もありますが、もう一つ別に、絵画や書類の束というような意味があります。そこから教育分野では、子どもの作品や子どもが集めた資料の一式というような意味で使われるようになりました。

そこで、ポートフォリオ評価は、ペーパーテストでは評価しにくい、子どもの学習意欲や文章表現力、ボランティアの精神や行動力、作品制作の力量と実績などを評価するために開発された評価方法です。

一般的には、クリアポケットファイルやスクラップブック、そして写真アルバムなどに、それまでの学習の履歴となる資料や作品を収めて、それをループリックやカンファレンスと呼ばれる自由討論によって評価することを特徴としています。

わが国では、総合的な学習の時間における子どもの多面的な成長を、ペーパーテストによらずに、子どもたちの自己評価と相互評価を通して、自分が「生きる力」をどれほど身につけてきたのかを振り返る手法として定着しています。しかし、ポートフォリオは、その本来のねらいを十分に生かすように、効果的に活用されているでしょうか。

残念ながら現状では、ポートフォリオはたんに資料をためておくだけの整理箱になっていることが多いようです。せいぜい、学年の終わりにたくさんの資料や学習カードで分厚くなったポートフォリオを見ながら、簡単な感想文を書いているだけに終わっているようです。

つまり、せっかく新しい評価の道具として定着し始めたポートフォリオは、まだまだ子どもたちが自分で主体的に「生きる力」を身につけ

るための道具や、自己成長と友だちとの相互成長を促すための道具にはなっていません。

では、どうすればよいのでしょうか。

ここでは、ポートフォリオ評価を一層充実させる3つの方法について、簡単に紹介しておきましょう。

1つ目は、「生きる力」の自己成長をしっかりと説明する証拠となる作品を作らせることです。例えば、1枚の大きな色画用紙に3つの成長ポイントと証拠写真を貼り付けた「自己成長シート」を作ったり、10ポケットほどの薄いクリアファイルに1年間の自己成長の様子をアルバム形式で整理した「自己成長アルバム」を作ってみましょう。児童・生徒がコンピュータを扱えるようになれば、画面上に写真や文章を上手にレイアウトして「デジタル自己成長アルバム」を作ることできます。このようにして自己成長を振り返りながら作品を作り、それを友だちや保護者の前で発表することによって、一層自分の成長に自信を持つことができるようになります。

2つ目の工夫は、ポートフォリオを用いた評価活動に十分な時間を保障して、評価セッションという授業を成立させることです。毎時間、たった5分間でつける自己評価カードでは、児童・生徒の自己評価力を育てることはできません。45分（中学校では50分）の評価セッションを、各単元に3回から4回程度実施してみましょう。

そして3つ目の工夫は、子ども自身に、自己評価の観点と規準を、そしてできるようになれば、自己評価の判断基準を自己設定させて、自己成長に自覚と意欲を持つ子どもを育てたいものです。



相互評価

●今日の子どもは、自尊感情が低いことが指摘されています。自尊感情を育み、友だちと支え合うための相互評価は、どのように行えばいいのでしょうか。



指導と学びの過程で行われる評価活動は、本来、教師にとっては指導の改善につながり、そして児童・生徒にとっては、自己成長と友だちとの相互成長を支えるものになることが大切です。

いいかえれば、全ての評価活動は、最終的には、子どもの自尊感情と友だちと支え合う関係を育むためのものであって欲しいと思います。

つまり、「できることが増えてうれしい」「自分もやればできるなあ」とか「もっと頑張ってできることを増やそう」といった学びの達成感や自己成長への決意を高めるように、子どもの自己評価と相互評価を行わせるようにしたいものです。

そのために効果的なのは、先に提案した評価セッションという場面を設定して、そこで十分に時間をかけて学びの成果について自己評価と相互評価を行わせることです。

特に、最近の子どもたちに見られる特徴は、自尊感情が低いことです。例えば、「どうせ何をやってもできない」とか「どうせ自分は頭が悪いから」、そして「友だちは自分のことを認めてくれていない」といった、自分について否定的な感情を持っている子どもが少なくありません。

その原因は、ほとんどの場合が、支え合う友だち関係を持っていないことです。本当に気の合う友だちは1人か2人はいても、最近の子どもたちはお互いに干渉したり傷つけ合うことを恐れて、一緒にいるだけの時間を楽しもうとする傾向にあります。お互いの悩みを話し合ったり、不安や心配を抱えた友だちの心理的な支えになるような言葉かけや働きかけをし合うような友だちは、ほとんどいないのが現状ではないでしょうか。

そこで、評価セッションという場面を設定して、友だちの成長を、教科学習だけでなく、総合的な学習の時間での活躍、行事やクラブ活動での努力を通して具体的に認め合うことから、子どもたちの支え合いの関係づくりを始めてみてはどうでしょうか。

初めは、自分のよいところを発表したり、友だちの成長をお祝いするのは、気恥ずかしいものです。しかし、少しずつ評価セッションを重ねていくにつれて、自分が友だちから認められることの喜びや、友だちが認められて喜んで見られる喜びに気づき始めると、子どもたちは、少しずつですが、友だちとお互いに認め合い、支え合えるようになります。いいかえれば、子どもたちがお互いを高め合う力、つまり相互成長力をもつようになるのです。

評価セッションの時間は、教科学習の時間からは取りにくいので、これからは、総合的な学習の時間の中でうまく評価セッションの時間を生み出したり、「この1年間の成長をお祝いしよう!」といった自己形成型単元を設定したりすることによって、各学年で必要な時間数を確保してみてください。

その中では、教科学習での学力向上の様子や、クラブ活動を通して得た成長、地域でのボランティア活動の成果、そして総合的な学習の時間で身につけた力などから、多面的に自己の成長を振り返って、そこからさらに自己成長への見通しと決意を持たせるように工夫してみてください。ここまでくれば、評価セッションは学級経営の大きな手だてになっていることに気づくでしょう。

